

## オンライン授業を経験して感じたこと

湯城 吉信

### はじめに

今まで対面で行っていた授業をすべてオンライン授業で行う、この一年は、そのような「実験」が、あらがえない強制力でもって突然、押しつけられることになった。このようなことは、今の日本では、この新型コロナウイルスの流行なくしてはまずありえなかつたであろう。

この例外的な事態に遭遇した者として、その経験を記録しておくことは重要なことだと思う。以下、私が自分の担当授業にどのように対処し、どのように感じたかを述べたい。

### 一 大東文化大学の状況

大東文化大学では、前期は授業開始が遅れたが、結局すべてオンライン授業となった。

一方、後期は当初は可能な限りの対面授業の再開が模索されたが、第二波

の影響もあり、結局はほぼオンライン授業になった。担当者の希望で対面授業を選択することもできた（その場合でも、オンライン授業も提供せよという条件付き）が、私の担当科目はすべてオンライン授業で行った。

この間、困ったことは、方針がなかなか定まらなかったことである。オンラインならオンライン、対面なら対面で、決定すればその準備ができるが、決まらなさとそれができない。ウイルス流行の状況が未確定な中、「基本オンライン」という方針をできるだけ早く決定すべきであつたと思う。

もう一つ感じたことは、「総合的」判断の重要性である。対面授業かオンライン授業か各授業で選択できることになった場合、結果として、オンライン授業と対面授業が入り混じることになる。住んでいる地域や時間割の関係で不都合が出た学生もいるはずである。そして、それは、社会全体の人の移動に影響する問題であり、個人的問題で片づけられる問題ではなかつたはずだ。

また、対面授業や会議システムの授業を行った場合も、それを受けられなかつた学生のためにオンデマンド方式での教材配布が義務付けられた。結果、基本対面授業と設定していた先生が教室に行っても学生が来ていないの

で、教室で一人授業を行い、それを同時配信およびビデオにとってオンデマンド配信することもあったと聞いた。コロナへの対応と授業の質の確保との両方への対応が必要であり、総合的判断が難しかったことは確かである。ただ、「こういう措置を取ればどういう事態が起きるか」という予想は十分にできたはずだ。今後、同様の事態が起きた場合、考慮すべき点だと思う。

## 二 前期授業について―課題提出型で実施

私の前期の担当授業は、以下のものであった。

- ・歴史文化学入門A（歴史文化学科一年生対象の基礎ゼミ）
- ・東洋史概説A（歴史文化学科の基礎科目（一年生が中心）だが、他学部の教職課程履修者も履修する）＊一三名の大人数授業。
- ・東洋近世・近代史研究A（歴史文化学科二年生対象）
- ・東西文化特別演習A（歴史文化学科三年生対象）
- ・専門演習（歴史文化学科三年生対象）七名
- ・中国文化史A（全学共通科目）

突然新しいことが突きつけられた場合、人は急には受け入れることができません、段階的にしか受け入れることができないという。今回のコロナ禍によるオンライン授業により私自身それを実感した。

最初に聞いた時は、私は特に演習などは不可能だろうと思った。また、あくまで非常時対応であり、できないことは仕方ないと割り切り、ストレスを少なく乗り切ることを考えた。お願いしている非常勤の先生にも同様のことを伝えた。

オンライン授業では、課題提示型、ビデオを録画して配信するオンデマンド方式、会議システムによる同時進行型授業の三つの方式がある。無理せずに行えることを方針とした私は、前期はすべて課題提示型で行った。ビデオを作ることや慣れない会議システムを使うことはハードルが高かったし、障害も予想できなかったからである。

また、課題提出型にした場合、大人数授業ではその課題チェックに追われることは十分に予想できた。一方、課題にコメントを返すことの重要性も予想できた。そのことに時間を取りつつビデオ教材を作ることには無理があると考えた。

## 三 課題提出型で考慮した点

課題提出型を行う場合に考慮した点を列挙する。

まず、パターンの構築である。あまり厳格にすると単調になるという問題点もあるが、授業のスタイル・パターンは確立する必要がある。また、気軽に教師に質問できないので、システムをわかりやすくすることは対面授業以上に重要である。私の場合は、毎回の課題を挙げる場所、回収する場所をmanaba（マナバ）という授業支援システムの「レポート」機能に集約し、週初めに課題を公開し、一定期間で回収し、その後、課題の模範解答・フィードバック、次の課題を配布するというパターンを固定した。

次に、基本、「教科書を読み、問いに答える」という形式の授業にした。中国文化史Aという授業は、例年は、学生の反応を見て、彼らに積極的に参加させる授業であったが、急遽、教科書（岡本隆司『中国の論理』）を指定し、毎回その一章を読んで、問いに答えさせる形式に変更した。

「教科書を読む」という形態を基本にしたのは、このオンライン授業が学

生にじっくり本を読ませる貴重な機会になると考えたからである。だが、それまでの対面授業ではただ漫然と出席していただけの学生も、毎回、自分で本を読んでそれをまとめる作業を要求されることになり、大変であったらう。(オンライン授業に対する不満はこの点も大きかったであろう。)

このような授業形態でもう一つ懸念したことは、「コピー&ペースト」の横行である。これはそれまでの授業でもあったことだが、オンラインで電子ファイルにより提出する形態だとより簡単に行える。上記の「教科書を読みその内容から答えを探し入力する」という形式はその予防策という一面もあった。

ただ、それでも、数人ながら、解答を見せ合っている学生を発見し、カンニング行為として不合格とした(そうすることは授業冒頭で説明しておいた)。特に目を光らせていたわけではないが見つけたしまったのは、自身の研究で複数のテキストを校合する経験を積んでいたことがあると思う。(学生の参考になるといけないので、どのように気づいたかはここでは説明しない。)

最後に課題のチェックについて述べたい。先に述べたように、特に大人数授業の場合、学生の提出物をチェックし、それにコメントをつけるのは大変である。対面授業の大人数授業でそれを行っている教師は希であろう。私も例年の大人数授業では、時々提出物を出させて行うだけで、成績はほぼ期末試験でつけていた。ただ、今回、課題提出型を選択し、毎回提出を課したために、学生、教員ともに毎回の提出物に追われることになった。この中で、「大変だがつけるのが望ましい」コメントをどのように行ったか、以下、私の方法を紹介する。

最初の数名をちゃんと見ると、学生の解答の傾向がわかる(どのような問題があるかなど)。まず、それにコメントを入れ、後の学生もそこを中心に

チェックして、それに対するコメントを使い回した(入力履歴で入力は省力化できる)。結果、多くの学生に同じようなコメントを返すことになったのだが、学生からすると自分だけへのコメントに見える(その学生には毎回違うコメントを返しているのだまわしているわけではない)。例えば、「よくできました」に相当するような言葉でもさまざまに言えるであろう。私の場合は、これはその時思いつく表現で述べたので、結果、毎回違う表現でコメントすることになった。以上のように、人間らしさと機械の便利さを組み合わせたり方を用いることにより、何とか、ほぼ毎回すべての解答にコメントをつけて返すことができた。そして、これは授業評価アンケートで学生からいちばん感謝された点であった。

なお、東洋史概説Bの最後の二回は冬休み明けの授業であったが、冬休み前に公開し、いつでも入力できる状態にした。これだけ時間的余裕があれば、学生、教員ともにゆったりとコメントを入力することができた。苦しいオンライン授業の最後だけはゆったりできてよかったと思う。

学生がコメントを喜んだ理由は人間の存在を感じ取ることができたからであろう。そして、これはオンラインで一番の問題だったと思う。ただ、オンラインにより「教師と直(一対一)でつながる」機会となったことも事実だ。対面授業以上に質問が出たり、対面授業で積極的に見えなかったが学生が積極的に参加したということもあったということは私の授業以外でも耳にした。

#### 四 専門演習などへの対応—課題提出型の場合

専門演習(ゼミ)は、当初、オンラインでの実施がもつとも困難だと思つた科目である。それは、漢文を読むにせよ、何かを研究するにせよ、図書館

の本を駆使することを求める科目だと思っていたからである。

私の所属する学科は三年前に新設されたため、本年度が初めての専門演習であった。私は、授業内容として、「漢文史料読解」「各自の研究」「論文の書き方指導」の三つを考えていた。ゼミ生が七名と少人数であったため、すべて各自が提出したものを私がマンツーマンで添削する方法を取った。これは、特に漢文史料読解については毎回相当の時間が取られたが何とかこなすことができた。

今回、図書館の書籍が自由に見られない環境で改めて気づいたのは、現在のインターネットコンテンツの豊富さである。インターネットの情報は問題があるとよく言われる。ただ、信憑性の高いデータベースも増えている。個々の紹介は省くがこれらのデータベースを活用することにより演習も成立させることができた。漢文を読む場合、『大漢和辞典』や『漢語大詞典』は必須である。これらが使えない学生がいるのは致命傷だと思っていたが、ネット辞書なるものもあり、「○○ 意思（中国語で「意味」の意）」と検索すると中国語でかなり詳しい語釈を見つけることができる（『漢語大詞典』の説明が出てくることも多い）。

東西文化特別演習A（前期）は英語を使う授業であった。その中で、英文を読解させる時、あえてGoogle翻訳の翻訳を併記するということを試みた（これはオンラインでしかできないことではないが）。これは学生の行動を先取りして、「これで終わるなよ。少なくともこの問題個所を修正しろよ」というメッセージを込めてである（学生にもその意図は伝えた）。周知のように、翻訳ソフトには様々な問題があり頼るべきものではないが、学生は外国語の課題を出された場合、安易に使う傾向がある。だが、本来は使えるところは使い、問題のあるところは対処するというように、上手に使うべきものである。その存在自体を否定するのではなく、どのように使うか実習す

ることは意味があることだと考える。

Google翻訳は、中国語だと発音（ピンイン）を確認したり、音声入力機能を使えば、自分の発音が正しいかどうかの確認もできる。それらを実際にやってみせることも、会議システムなどを使った授業では簡単にできる。これは後期のゼミ、中国文化史の授業などでやって見せた。国会図書館にある資料をどのようにして調べるかを、場所から行き方、館内の様子までインターネット画面を見せることによりシミュレーションするなども行った。こういうことは対面授業でも画面を投影して行えなくはないが、コンピュータでもない限り、学生の手元で見せ、実際に操作させることは難しいであろう。

## 五 後期授業について―会議システムによる同時進行型授業の導入

私の後期の担当授業は、以下のようであった。

- ・ 歴史文化学入門 B
- ・ 東洋史概説 B
- ・ 交流史研究 B \* 「鉄炮記」を扱った。
- ・ 中国文化史研究（歴史文化学科三年生対象） \* 『論語』を扱った。
- ・ 専門演習（歴史文化学科三年生）七名
- ・ 中国文化史 B（全学共通科目）

私は、前期はすべて課題提出型で、学生と顔を合わせず、声も聞かずに授業をしていたが、後期は、上記の中、「歴史文化学入門 B」「交流史研究 B」「中国文化史研究」「専門演習」で、つまり六科目中、四科目でズームとい

う会議システムを導入した。このシステムによる授業方法を聞いて自分でも扱えることがわかったからである。また、オンライン授業に本格的に取り組む必要を感じたこと、前期とは変化をつける必要を感じたことなども理由としてある。

その中、歴史文化学入門Bは学生にグループを組んで、各グループにテーマを考えさせ、各自の担当を決めてそれを調査し、レポートにまとめ、口頭発表させる授業であり、会議システムなしには成り立たない授業であった。慣れていないために操作に戸惑ったことはあるが、グループごとに作業させるブレイクアウトルームの機能なども使いながら問題なく行うことができた。学生の反応は「授業らしい」「みんなの存在が感じられてよかった」とおおむね好評であった。また、新しい経験ができる楽しさもあったと思う。ただ、会議システムを導入したすべての授業において、何回かズームで行った後に、課題提出型も併用することにした。課題提出型には各自にじっくり責任を持って作業させるというメリットがあること、両者を併用することにより授業にメリハリがつけられると思ったことがその理由である。

## 六 課題提出型での新たな工夫

前期の東洋史概説Aでは、課題を提示するだけであったが、後期の東洋史概説Bでは、それに加えて、新たにパワーポイントによる説明を追加した。まず、昨年まで板書していた内容を入力し、各シートに音声データを挿入した。全体をビデオ形式にしなかったのは、作成途中で失敗すればやり直しをする必要があり、作成に難度を伴うという作成者側の理由もあったが、あくまで副教材のパワーポイントであり、各自が見たいところを見たいペースで見られるようにこの形態の方が適していると考えたこともある。

このパワーポイントの制作を通して、一枚のスライドが一つのまとまりのある内容を述べるのに適した大きさであることを今更ながらに気づいた。二年目の授業まではこのような内容をいちいち板書していたが、来年度は対面授業になってもパワーポイントを映し出し、そのファイルを学生が見られる場所にアップしておけばよいのではないかと思った。

## 七 専門演習などでの工夫―会議システムを使った授業の場合

専門演習は、後期は、会議システムにより、皆で同じ文献を読んだり、調査内容を発表したりする形式に変えた。教材は共有画面で提示したが、特に漢文を読む場合などは、該当部分を反転表示で示することができるのは教室で行う授業よりも便利だと感じた。

ただ、上述のように、それを数回続けると各自がじっくりと作業する必要があるため、また課題提出型を併用した。

このように、後期は会議システムも導入し、その機能（ブレイクアウトセッションでグループ作業をさせるなど）を使いつつ、必要性に応じて、課題提出型も併用し、授業方法に変化を持たせた（これはハイブリッド型という格好いい名称があるようだ）。

## 八 体験を通じて見えたメリット

「オンライン授業は大変であったが、メリットがあることもわかった」というのがおそらく経験者に共通した見方であろう。ただ、テレワークがそうであったように、もし対面かオンラインかという二者択一になれば対面を選ぶという学校が多いことも確かであろう。私は、オンライン授業で見えた良

さは今後も残すように考えるべきだと思う。

以下、オンライン授業を通じて見えたメリットを挙げてみたい。

まず、クラウド型教育支援サービス（大東が採用しているものは *Canvas*）を授業のプラットフォームとして確立できた点である。実はこのシステムは以前から導入されていて、これを使って授業の通知をしたり、課題を出したり、回収したりすることもできた。だが、学生、教員ともに随時見る習慣が確立されていなかったので使用頻度は限られていた。それが今年度オンライン授業になりこのシステムが授業のプラットフォームとして定着した。これは今年度の授業を経験した学年には今後もそうできるであろう。

また、授業形態を多様化する契機になったことである。すでに述べたように、対面授業かオンラインか、そのオンラインの中でも、課題提出型か、オンデマンドか、会議システム型かという択一を迫るのではなく、それらを有効に組み合わせた授業運営は今後も考えてもよいのではないか。

確かに、複雑な形態が組み合わせること、例えば、時間割の中で、対面授業とオンライン授業が混じり合うことは現実的ではない。ただ、個々の授業内でも、また、全体のカリキュラムの中でも、オンライン授業を部分的に活用することはあり得るだろう。

これまでも、大学には、遠くの講師を短期集中的に要請する集中講義や、土日での特別講義のように、変則的授業が存在した。複数のキャンパスに跨る授業を有している大学も多い。そのような授業を土曜開講科目としてオンライン授業をする（それ以外でもオンライン授業したい科目を土曜日に行う）という行っている、土曜日はオンライン科目の授業日とすることもありえる（という）ことも考えられるのではないか。

語学の授業では、例年の対面授業より授業がやりやすいということも聞いた。それは教師と学生が一对一の関係になり、授業を乱すオピニオンリーダー

がいなくなったということがあるようだ（注1）。

授業は、科目も教師も学生も様々で、それぞれが一つの複雑な社会であり、こうすればよいという絶対的方法はない。本年度のオンライン授業を経験して、私が思ったのは、今年の実験を生かし、来年度以降も、授業を豊富にするための選択肢としてオンライン授業の要素を取り入れることを考えるべきだということだ。今年、作り上げたものを捨ててしまうのはあまりにもつたいないではないか（注2）。

## 九 研究時間について

最後に、大学教師にとって教育とともに重要である研究について述べておきたい。私の場合は、後期の途中まではなかなか研究の時間は取れなかった。前期は、オンライン授業が始まるまでの時間はその準備・対応に追われ、授業が始まってからは提出物のチェック・添削に追われた。そして、夏休みも後期の準備に追われた。やっと時間ができたのは後期の会議システムと課題提出型のバランスを会得してからであった。（後期の受講生が前期より少なかったのも助かった。）ただ、来年もう一度行なうなら話は別である。今年の実験を生かすことができるので、授業の質を上げることも、研究の時間を取ることも、今年度より容易になるであろう。

## おわりに

この一年来のコロナ禍に遭遇し、我々は、それまでの日常のありがたさを痛感し、社会そのもののあり方を考える契機になった。在宅勤務やリモート会議の可能性を探ることもできた。

授業についてもまたしかりである。この一年の「実験」を経験し、「やはり授業は対面でないといけない」と感じた人もいるだろうが、「オンライン授業にもよい点がある」と感じた人もいるだろう。そして、いずれの人にせよ、授業そのものを考え直す機会になったことは確かであろう。

この貴重な経験をどう生かすかは、今後の我々にかかっている。

私の場合は、ゼミを含め三年生の授業は初年度がオンライン授業となったので、次年度以降も、今年度の方法が基準になる可能性がある。また、一年生は、「大学の授業Ⅱオンライン授業」となったために、次年度以降、「対面授業への適応」という新たな問題が生じるかもしれない。コロナ二年目もまた新たな挑戦の年になりそうである。(二〇二一年三月脱稿)

## 注

(1) オンライン授業は、学生の集団が形成されない(それ以外で形成されている場合を除く)というのが、対面授業との最大の違いであろう。このことには当然、デメリットも存在する。学生の教え合いなど有益な情報のやり取りが行いにくくなるなどである。ただ、一方、授業を阻害するそれもなくなくなったということもある。教師や学生がそれに煩わされていた場合にはそれから開放された場合もあるであろう。

授業を社会体験の場としてとらえ、またそのプラス面を評価する立場からは、オンライン授業は問題があるだろうが、逆に、それを重視せず、授業は教科内容を教える場とだけとらえて、また実際の授業においてそれらのマイナス面が目立っていた場合は、オンライン授業はよい授業ということになる。

これらは考え方の違いやその時の状況により変わるので一概にどちらがよいと

は言えない。「選択肢」としていろいろ選べる状態がベストではないか。

(2) オンライン授業を残すことは、社会全体の密を減らす観点からも考慮すべきだと考える。今回のコロナ禍が一応の収束を見た後も、感染症予防の観点からも、社会のストレス軽減の観点からも(今回のコロナ対応によりこれまでの密から解放されてほっとした点があったはずだ)、社会全体の密を一定割合軽減することは考えるべきだろう。そのために、大学のオンライン授業を部分的に残す、あるいは導入するという考えはありえよう。これまでの社会の対応を見ると、「蔓延した」↓「制限する」↓「収まった」↓「緩和する(戻す)」というサイクルを繰り返していた。そうではなく恒常的に密を減らす努力が必要であろう。

## 〔追記〕

二〇二一年度は、基本的に対面授業になった。ただ、コロナ禍が収まらない中、(密回避のため)教室の規定人数(定員の半数)以上の履修者がいる科目は、オンライン授業に変えるか、ハイブリッド型にするか、対応が迫られた。私の東洋史概説Aでもこの対応が求められ、対面組とオンライン組の二つに分けることにした。説明の上、学生に選ばせた(対面とオンラインが四対三の割合)ので、学生の要望に合わせることはできたと思う。

だが、いざ始める段になって、二つの授業を行うことになること、オンラインの課題・解答はmanabaで対面授業の学生にも公開されるので、解答が事前公開されることがないように対面授業のペースをオンラインのペースに合わせる必要があることに気づいた(後期のBで合同授業が再開する可能性があることを考えても両者を合わせておく必要がある)。

これは面倒でもあるが、対面授業の学生に、事前に課題を見せ予習を可能にし(いわゆる「反転学習」)、また板書内容や解答もmanaba上に公開し復習に役立てることを可能にする(私の場合、ずっと公開するので授業でや

ったことを一望できる)点、学生にとってはメリットがあるのではないかと考える。結果については後日機会があれば報告したい。(二〇二二年四月)

湯城 吉信 (ゆうき・よしのぶ)

一九六四年生まれ。大東文化大学文学部教授。専門は日中思想史・中国史。主要論文「ジラフがキリンと呼ばれた理由―中国の場合、日本の場合(麒麟を巡る名物学その一)」(『人文学論集』第二十六号、二〇〇八年)、「中井履軒の宇宙観―その天文関係図を読む」(『日本中国学会報』第五十七号、二〇〇五年)、「陳徳による嘉慶帝刺殺未遂事件について」(『大東史学』第三号、二〇二二年)など。